連載

第155回 花と面白きと珍しきと、これ三つは同じ心なり



東京大学 中尾 政之*

*なかお まさゆき:博士(工学)。東京大学大学院工学系研究科教授。1983年、東京大学大学院卒業後、日立金属に入社。HMT Technology Corp.を経て、1992年東京大学大学院工学系研究科助教授、2001年教授に就任。2010年4月から同大学産業機械工学専攻 専攻長を務める。著書に「失敗百選」(森北出版)、「創造はシステムである」(角川書店)など多数。

結局、時節ごとに「花」を得て、大学で生 き延びた

紅白歌合戦も終わって2023年になった。真夜中に布団に入ってから、柄にもなく、老後に向けた「新年の誓い」を考えた。できるならば、これまでの人生とシームレスにつなげたい。といっても、「これまでの人生」を内省したことはなかった。いつも前向きに突進してきたから。これまでの人生は成功だったのか?

40年前、大学を出て会社に入ったとき、何でも 知っている先輩の主任たちがまぶしく見えた。彼 らになかなか追いつけない。まるで真っすぐの道 が地平線まで続くように、会社人生も永遠に続く ように思えた。ところが光陰矢の如し。もう64歳 になった。道の終点である。あのまま会社にいた ら、役員になれたかなあ。でも働いていた日立金 属も親会社に売られ、プロテリアルという会社に 1月4日から変わった。役員になったら、内情はも 1月4日から変わった。役員になったら、内情は 37でもっと苦しんだかも。会社では個人がいらら 頑張っても、組織としては無情にも国内外から圧 力が働く。その結果、下々の個人の運命は大きく 揺れ動く。となれば、33歳のときに大学に転職し たのは結果的に良い決断だったのか?

大学の良いところは、「個の力」で何とでもなることである。会社と比べれば、組織に左右されない。結果的に筆者は34歳から30年間、年に5000万円以上の研究費をずっと稼げて、とにかく楽しい研究生活を過ごせた。アメリカの子会社で働いていたときの上司をまねして、筆者が「What's new?」と問うと、学生たちはせっせと面白いデータを見せてくれる。これは楽しい。ヒラ教授で終わったが、大学に転職して大成功だった

と心から思っている。

もっとも個の力が効くということは、逆に言えば、「鳴かず飛ばず」だと誰も助けてくれないのと同じ。そして教授のポストは数に限りがある。筆者が教授になった2000年は、大学改革のちょうど初めの頃だった。つまり、順繰りに講師、助教授、教授と、講座内で出世できる仕組みが崩壊しつつあった。教授審査の42歳のときも、筆者の運命は先行き不明だった。東大に残れなかったら地方大学に転出となる。東京近郊の一軒家を買い控えただけでなく、洗濯機やエアコンが不調になっても、妻には「新しいのは教授になってからね」と言い続けた。よく生き延びられたモンダ。そこで考える。どうして生き延びられたか?

ここで題目に戻る。世阿弥は風姿花伝で「花と面白きと珍しきと、これ三つは同じ心なり」と言っている。興業の秘伝である。「その時節にあった出し物を新奇的に実行せよ」と言っている。もちろん、出し物を名人芸で演じるには、たゆまぬ修行が必要である。でも同じ研究テーマを40年間続けても、発明・発見がなければ、必ずしも名声が得られるわけではない。世阿弥が偉いのは、たくさんの新作の能を発表したことにある。これは新商品を設計し続けるエンジニアと同じである。

そうだ、筆者はいつも「花」を探していた。思いついただけでも、超精密加工、マイクロマシン、加工の知能化、情報機器技術、医療工具、設計知識管理、失敗学、型成形、ナノインプリント、生産技術、創造設計、脳科学など、クルクルと看板を書き換えて生き延びてきた。節操がないと言われてもどこ吹く風で。でも本人が常にワクワクして面白そうな顔をしていたので、周りもその気分

機械設計